

洞爺湖畔で温泉が発見されたのは大正六年六月であり、その秋、早くも温泉宿が建てられているから、洞爺湖温泉の歴史は五〇年といつていい。

この五〇年の間に旅館は三〇軒、収容力は六、〇〇〇人、その他保養所一四、土産店二四、食堂二三、飲屋八二が軒を並べ、これらに従事する人とその家族の住宅、さらに学校、病院などが建ち並んで人口五、〇〇〇人、一、三〇〇戸の町にふくれあがってしまった。高層化も進み、六階建以上がすでに六軒ある。最近とくに経済的余裕、交通網の発達により利用が増し、これが施設の拡充呼び、さらにまた利用増をきたすという循環をくり返している。

ここ数年利用者はほぼ一〇%の伸びを示し、昨年は二〇〇万の万台を越えた。また施設についても旅館、住宅、売店、飲屋などの新築、増築の申請は年一〇〇件を下らない。

つまり、それだけ自然が占めていた空間を人工物が侵していつていることになる。これを人は発展といい、為政者も町民も積極的に後押しをする。

この都市化からは当然、公害の問題も生まれてくる。つまり廃水による湖水の汚濁

であり、ゴミの山であり、スピーカー、モーターボート、ゴーカートの騒音である。

もともと自然とのコミュニケーションを図るべく、その媒体として存在した施設が

対照として主人におさまり、その豪華さ、珍奇さ、面白さを競い、娯楽の場を提供す

膨脹する温泉町



(洞爺湖)

小原豊明

主が、自らならんかの施設を作ってみたくと考えているかのようである。

カラマツ林もやがて伐り倒され、宅地造成され、分譲される。

本来、これをくい止めるのが、公園管理の仕事には違いない。

しかし、有珠岳一帯、中島、湖畔の狭い林を除くと、ほとんどが民地であり、しか

る。主人であるべき自然は、単に舞台のバックでしかなくなる。

自然に囲まれた公園利用の基地という状態が、逆に街に囲まれた小さな自然になっ

てしまう。自然公園から都市公園への退却である。洞爺湖が建物でとりまかれるのも

それほど遠い将来ではないだろう。

現在田畑であるところも、土地のより一層の値上がりを待っているか、あるいは地

も、その大部分は細分化されていく。○から一〇〇か

ら一〇〇か。○になるのはおさえることができて、一〇〇から一、一〇〇

になるのをくい止めるのは難しい。徐々に膨脹するものをはつきり枠をかた

めて、それ以上になることをおさえるのは困難である。

さほど連わらない環境であるならば、一方の土地に七階建のホテルを認め、一方をシ

ヤットアウトするのは不可能である。しかも補償体制がきわめて貧弱であると

すれば、一〇の主張を八ぐらいにしてみらうほどのことしかできない。支障木の伐採は最少限度に、建物のまわりには修景植栽を、山を削れば法面緑化をと、破壊の程度をなるべく少なくすることしかできないのである。

いまの洞爺湖周辺の問題は、建物の色彩や形がどうのこうのという小さなものでなく、ガン細胞のごとく徐々に膨脹をつづけている街をどうするかである。

単に地図に線を引いてみても、これを止めることはできない。

地主にしてみても、自然破壊が良いとは誰も思っていない。しかし、彼らもくわねばならないし、より豊かな生活を望む権利がある。抑制には、それだけの見返りがなければならぬ。

今年もまたシーズンがやってきた。どんなん貸切バスでやってくる。花見の客も、モーターボートの客も、夜、丹前寮で土産店街を歩いている人々も皆、結構楽しそうである。

今日も、大レジャーセンター建設の話が耳にはいつてきた。

(支庁洞爺国立公園管理員)